

〈YC:地域デザイン演習Ⅱ(履修目安学年 2年)〉

夢パまつり実習

開催日時：2023年7月22日(土)、23日(日)
 場 所：川崎市子ども夢パーク
 参加人数：19名(法学部5名・経済学部3名・人間科学部10名・国際日本学部1名)
 担当教員：西野博之 非常勤講師

地域デザイン演習Ⅱ(担当教員:西野博之非常勤講師)履修者19名が、川崎市子ども夢パークでの「夢パおたんじょう日まつり」に運営参加し、実習を行いました。学生たちは、この実習を迎えるまでに、西野博之先生から「夢パーク」の意義や役割を学び、満を持して当日を迎えました。



目 的

プレーパーク(冒険遊び場)の運営現場での実習を通し、多様な他者との出会い、リアルな体験活動を行うことによって、困難な課題に向き合える実践力を育みます。様々な背景を抱える子どもたちとの直接的な関わりを通じて、子どもの気持ちの受け止め方を学び、子どもが発する「試し行動」に、どのように向き合い、コミュニケーションを図っていけるようになるかを学びます。

場 所

「川崎市子ども夢パーク」
 〒213-0033 神奈川県川崎市高津区下作延5丁目30-1
<https://www.yumepark.net/>

日 程

2023年 7月22日(土)8:45~18:00
 7月23日(日)8:45~18:00

当日の様子

1日目は、石を拾ったり、木材を拾ったりと、子どもたちが安全に遊べるように、翌日のお祭りのための準備を行いました。石や木材は、拾っても拾っても、拾いきれないほどでした。そのほかにも、ドラム缶風呂用の薪割りやテントの設営などを行いました。

2日目は、夢パークの20周年をお祝いするお祭りの当日です。学生は、受付、駐輪場、ドラム缶風呂など、それぞれのグループに分かれて、運営を手伝いました。手伝いの合間には、子どもたちやスタッフ、他の学生とふれあい、本気の遊びを体験しました。炎天下の中、誰一人、体調を崩すことなく、二日間の実習を終了することができました。

自由で創造的な遊びを探求する夢パークは、遊びの聖地です。本気で遊ぶ子どもたちやスタッフを目の当たりにし、その中に飛び込んでいくことで得られた経験は、とても貴重なものとなりました！



参加学生のコメント

〇2 日間の実習を通し、夢パークのスタッフの方の温かさをまず感じました。だれも怒る人やピリピリしている人がおらず、みんなが心に余裕をもって仕事をしていた気がします。そういったことが子供たちにも自然と伝わり、楽しい雰囲気になるのだと思います。私自身、土曜にふと疲れた瞬間に子供に嫌な顔していると指摘されたことがありました。社会教育施設等で働く際は、そういった感情を極力見せないようにするのも、場の雰囲気を作るために必要だと実感しています。授業を通してですが、こういったことを経験できてよかったです。(経済学科 2年 S.M)



〇今回の実習を通して自分の中で得られた大きなものは二つある。

一つ目は、とにかく仲間と仲を深めることができたということである。自分本位となってしまうかもしれないが、それこそが実習を心の底から楽しむことができた大きな理由であると感じたからだ。今回をきっかけにして、これからも付き合いしていく仲間ができたと思う。

二つ目は、この夢パ祭りの中でしっかりと役割を担えたという経験である。少し抽象的ではあるが、火を焚いたドラム缶風呂であったり、前日に作った、水を使って遊べるタコのオブジェで遊んでいる子供を見たり、泥遊びの中で自分を気に入ってくれて遊びまくったりというようにして、微々たる力だったかもしれないが、自分がかかわったことで子供たちが楽しんでくれたということが非常に自分自身にとっても嬉しいものだった。

間違いなく今回の経験は、貴重なものでなかなかできるものではない。今回の経験をどう生かせ

るかなどはまだわからないが、自分の人生の中で一つ大切な瞬間ができた。(経済学科 2年 T.E)



〇私は今まで人と仲良くなりたいと思っていてもうまくいかないことがあり、ほかの人と比べて落ち込むことが度々ありました。しかし、今回の実習で職員の方や遊びに来ている子ども、一緒に実習に来た仲間と話すうちに、自分が今まで人の話を聞く前提で、自分の話をして知ってもらおうという積極性に欠けていたことに気が付きました。

自己主張をしすぎると協調性に欠け相手から距離を置かれてしまうこともあります。大前提として人と仲良くなるにはまず自分から心を開かなければならないということに今まで気づかず、この実習は自分が人とのかかわり方を見直すきっかけになりました。また、運営のお手伝いをしていく中で、スタッフの方々が本当に幅広く業務にかかわってくださっていることを知りました。しかし裏での準備の大変さを決して表に出さず、笑顔を絶やさず子供と接しており、「相手を楽しませるにはまず自分から」ということを改めて学びました。

実習に行く前は「虫嫌い、夏嫌い、泥なんてもってのほかだけど大丈夫だろうか」と不安でしたが、必死に動いていると木陰の風や泥が気持ちよく感じました。これは自然と触れ合わなければわからなかったことであり、子供のころの自然と触れ合うことで感じた楽しさを思い出すことができました。

今回の実習で目標にしていた、子どもと大人両方の視点で参加するということは今の自分には何ができるのかを考えるきっかけにもなりました。この実習で一番学んだ「積極性」という部分を次のステップでの課題にし、地域と関わるための力にしていきたいと思います。(人間科学科 2年 T.Y)

〈MMC:地域デザイン演習Ⅱ(履修目安学年 2年)〉 こどもゆめ横丁実習

開催日時：2023年11月4日(土)、5日(日)

場 所：川崎市子ども夢パーク

参加人数：11名(国際日本学部11名)

担当教員：西野博之 非常勤講師

地域デザイン演習Ⅱ(担当教員:西野博之非常勤講師)履修者11名が、川崎市子ども夢パークでの「こどもゆめ横丁」に運営参加し、実習を行いました。学生たちは、この実習を迎えるまでに、西野博之先生から「夢パーク」の意義や役割を学び、満を持して当日を迎えました。



目 的

プレーパーク(冒険遊び場)の運営現場での実習を通し、多様な他者との出会い、リアルな体験活動を行うことによって、困難な課題に向き合える実践力を育みます。様々な背景を抱える子どもたちとの直接的な関わりを通じて、子どもの気持ちの受け止め方を学び、子どもが発する「試し行動」に、どのように向き合い、コミュニケーションを図っていけるようになるかを学びます。

場 所

「川崎市子ども夢パーク」

〒213-0033 神奈川県川崎市高津区下作延5丁目30-1

<https://www.yumepark.net/>

日 程

2023年 11月4日(土)10:00~17:00

11月5日(日)8:45~18:00

当日の様子

「こどもゆめ横丁」とは、子どもたち自身が、自分たちで出店内容を一から考え、工夫してお店をつくり、そしてお客さんを相手に本物のお金を使って商売をするというイベントです。子どもたちの自主性を重んじ、大人は手や口を出さないことがルールとなっています。

11月4日(土)は、翌日に控えた「こどもゆめ横丁」の前日準備を行いました。子どもたちが安全に作業を行えるように、拾っても拾いきれないほどの石やゴミを拾い集めたり、次の日の装飾のためにツタをとったりしました。



意外に大変だったツタ取り！

5日(日)は、いよいよ「こどもゆめ横丁」の本番です。学生たちは受付係、駐車場係、バイトセンター係の3班に分かれ、それぞれのシフトに沿って、実習を行いました。フリーの時間は、横丁で買い物をしたり、プレーパークにいる子どもたちと一緒に遊んだりしながら、子どもたちと触れ合いました。閉店後は、子どもたち自身で売上の計算をした後、大人も手伝って、一気にお店を解体しました。準備から片づけまで、子どもたちが本気で頑張る姿を見て、様々なことを学んだ二日間でした。



ゆめ横丁全体風景
今年は50店舗に迫る店舗数でした！

参加学生のコメント

○手が空いていた時に、スタッフの方に「両替所の壁に絵描いてもらえる？」と頼まれました。私は絵を描くのが苦手なので、即答できませんでした。自信はなかったのですが、友達がやってみようと言ってくれたので、やってみることにしました。しかし、台無しにしちゃいそうでなかなか書き始められず、書きはじめても「こんなんでもいいのかな」と連呼していました。しかしその時に、ある子がきて「自分がいいと思えばいい とりあえずやってみる」と言ってくれました。とてもハツとさせられました。芯の強さ、素直さを感じたと同時に失敗をしていいところなのだなど実感しました。その子の言葉のおかげで下手でも、やってみたいことはやってみようと思い、たくさん描いてみました。上手ではなかったですが、普段はみんなで絵を描くなどといった美術関連のことをするときは、常に心に引っ掛かりがありなかなか楽しめないのですが、あの子の一言で楽しむことができました。自分がもうやったことは自分がいいと思ってやっていることが多いので、誰かの評価に捉われず自分がいいと思うことをやることの大切さをその子の「自分がいいと思えばいい とりあえずやってみる」という言葉のおかげで感じることができました。(国際文化交流学科 2年 Y.M)



○今回の実習は子供たちが一から夢横丁を作り上げ運営している様子を見るという貴重な体験をすることができた。最初は子供と接した経験があまりないため不安が大きかったが、子供たちの生き生きとした表情や笑顔、無邪気な姿を見て関わっていくうちに不安がなくなっていった。子供たちは私たちが思っているよりも考える力や子供にしかできない発想力があることを実感できた。また夢横丁を終えた後の達成感溢れる表情が印象に残っている。このような何かをやり遂げたという経験は子供た

ちが大人になった時に大いに活かすことができるのではないかと考えた。現場を間近で見たことでスタッフの方々の子供たちとの接し方や社会教育者としてのイベント運営方法などから多くのことを学ぶことができたと感じた。(歴史民俗学科 2年 T.H)

○私が育ってきた環境は怪我をしそうな場面の際は大人に止められてきた環境であったり、やりたいことができない環境の中であった。しかし、夢パークの中では、自由に木登りする子供がいたり、火のそばで楽しそうに話して



いる子供がいたりして作業している中でそのような光景を目にして、すごく不思議な場所にいるような気持ちになった。実習中に実際に子どもが倉庫のような高いところから降りようとしていて、落ちたら怪我を負ってしまいそうな場面を目撃した時があり、私は危ないと止めてしまいそうになってしまった。しかしその気持ちを抑え、何かあった時にすぐ対応できるようにしていたら、子供同士で助け合って近くにあったものを重ねて階段のようなものにして安全に高いところから降りていた。子供の考えの柔軟性や対応力の高さに私は衝撃を受けた。大人に、事故を起こす前に止められていたら、私が見たような柔軟な思考力はつきにくいだろう。私はそこで夢パークの存在の大きさや意味を改めて学ぶことができた。(歴史民俗学科 2年 S.R)

